

町の鳥 「フクロウ」 の ルーツをたどって



当別町開拓 130 年を迎えた節目の平成 12 年一。町は " 当別の森に棲み、広く町民に親しまれている " 「フクロウ」 を町の鳥に制定しました。

また昨年 1 月には、町内在住の野鳥写真愛好家から、町内に棲むフクロウの大写真が町へ寄贈されました。

これらを契機にフクロウを活用した " まちおこし " などのため、2 月には「本通振興会」の商工業者が中心となり、フクロウにまつわる写真・絵画・版画などを展示する「当別ふくろう展」が開かれました。

期間中には大勢の方々が来場した同展ですが、今年も昨年に引き続き開催されます。

そこで今回は、2 回目の開催となる「当別ふくろう展」のほか、フクロウと当別町との関わり、フクロウに込めた町民による " まちおこし " などについて紹介します。

「フクロウ」人気

フクロウは、ユニークな愛らしい動きや威厳のある表情から古今東西で人に愛され、置物・小物などの収集家が数多くいます。

さらに、今話題の映画「ハリリーポッター」でお馴染みの「シロフクロウ」などで高い人気を集めています。

また、昔から英知の象徴として愛され、今のような不況時には「福籠」（福が籠り、縁起が良い）、「不苦勞」（苦勞知らず、不老長寿のお守り）、または「梟」（商売繁盛のお守り）など、「ゴロ合わせ」でげんをかづく人もいます。

「当別ふくろうの会」でもゴロ合わせで、2月9日を「ふくろうの日」と決めています。

フクロウの特徴

顔の側面に目が付いている他の鳥類と違い、顔の前面に目が2つ並んでいます。

このため両眼視できる範囲が大変広く、視野を立体的に把握する能力に優れ、暗闇でもよく見えます。

また、大型のフクロウ（体長1メートル程度、体重では人間の15分の1程度）の眼球では、人間の眼球とほぼ同じ大きさなので、いかに大きな目であるかが分かります。

目

耳

頭蓋骨の大きさに比べ、とても大きくて発達した耳を持っています。正面から見ると、左右の耳の高さが異なります。音源の位置を立体的に捉えるのに好都合です。

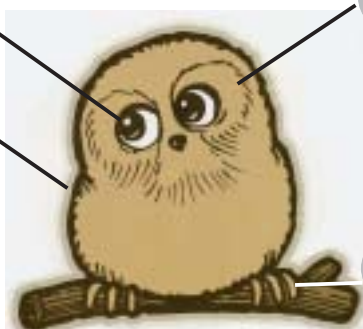
羽

面を縁取るように、顔の周囲には短くて硬い羽根が生えていますが、集音装置の役割を果たしていると言われています。

また、翼にはすぐれた消音機能があり、暗闇の中を獲物たちに気付かれることなく飛ぶことができます。

足

フクロウの足の指は、幼鳥では前に3本・後ろに1本、成長した親鳥では前に2本・後ろに2本に分かれます。獲物をがっちり捕まえるのに適しています。捕らえた獲物の命を奪うのは足と爪ですが、すさまじい握力で絞め殺してしまいます。



↑「子ども情報センター」情報誌のキャラクター。情報誌では子供の体験活動・子育て情報を紹介しています。
※情報誌の配置先・詳細＝NPO法人 当別エコロジカルコミュニティー（事務局＝辻野建設内・☎2-4305）

生態

一般的に山奥に生息し、里山と言われるような山と田畑などが入り混じった地形や、広葉樹の林もあるような場所や人々の営みがあるような場所まで、餌を探しに降りてきます。

ペリット

鳥類には歯がなく、捕らえた獲物を丸呑みしてしまいますが、大きな獲物の場合は、一口大に引きちぎって呑み込みます。そうして呑み込んだ食物の、骨や毛皮・羽根などの消化できない部分は、ひとかたまりにして口から吐き出します。これを「ペリット」と言います。ペリットは、野生の猛禽類の生態や食性を調べるのに、重要な手掛かりとなります。

餌

ムカデやカエル、蛾などの小さなものからハトやウサギといった大きなものまで多様ですが、中でも好んで捕獲するのがネズミです。

当別町とフクロウ

「道民の森」では、エゾフクロウ・アオバズク・コノハズク（3種類）のフクロウの存在が確認されています。

実物を写した写真はこれまでありませんでしたが、野鳥愛好家の藤原伸彦さん（転勤のため1月、弥生から札幌市へ転出）がフクロウの生態などを通じて生息場所を発見。幾度となく観察を続け、撮影に成功しました。

また昨年1月、町主催の新年交礼会の際、藤原さん撮影のフクロウの大型写真（2ページ）が町へと寄贈されて以来、2月には「当別ふくろう展」の開催、3月には「当別ふくろうの会」が設立されるなど、町内ではフクロウによる「まちおこし」の機運が高まり始めました。

ここにもある。

フクロウ・キャラクターなど
「ビトエ」「蔵岱」の犬看板

